

祖父（寺門彦太郎）について

新潟県胎内市 寺門登志

今年祖父が亡くなって80年になる、祖父は安政生まれの人だった。私が生まれた頃は、既に亡き人であったが我が家の座敷の長押の上に、等身大の若き日の祖父の写がかかげられていた。これは、父が13年忌を行った時、私共子等にその遺影を見せておきたいために、祖父の医師免許証を取得する時の写真を探し出し引き延ばして額に入れて飾ったものだった。

それから、数十年を経た現在、弟は豊栄市へ引っ越したので、この町に住む私がお寺の月参り墓参り引き受けている。

私は高齢者大学にお仲間入りさせていただいて間もなく十年になろうとしている。

お盆に豊栄へお参りに行き、引き延ばす前の祖父の写真を見つけ、何か懐かしくなって祖父のことを子や甥、めい、孫などに書き残してやりたいと思立った。

祖父のことは、私が幼いころから祖母が縫物等しながら、問わず語りに繰り返して聞かせてくれたものだった。それは、祖母の若い日を追憶するような語り口だった。私は祖母のかたる祖父の話をつも初めて聞くような顔で聞いたものである。

祖父は、水戸藩の若い与力・寺門登一郎の長男として生まれた。生まれた年が安政2年、折から、水戸藩の内紛、続いて明治維新となる激動の日本に生まれた人だった。幼少の頃の祖父は、士族の子なので学問も藩校で学び、柔術、剣術、水練は水戸の水府流等を厳しく指導されたとのこと。祖父は後年医学校見習生として関川村下関の佐藤玄信様の家に寄寓していた。

祖父が13歳の頃、あの有名な会津藩の戦闘があり、祖父もその中の一人であったとのこと。松平様は、いよいよ出陣に臨んで関兵された時、水戸の援軍の前では深く頭を下げられたことを祖父は晩酌の時などなつかしげに語ったと祖母が言っていた。敗戦の会津は、他からの援軍を討ち死にさせまいとして使者を立て恭順の意を表し、水戸の援軍は無事に帰してくれた。敗走の時は、会津の殿様の下屋敷で夜具もままならず、奥様お嬢様の打ち掛けなどを着せてもらったと、これもまたとおきの話だったとか。

同じく水戸では、天狗党、諸生党の内紛があり諸生党の大將であった祖父の父は、天狗党に捕らえられ久慈川原で磔刑になったため、家禄は没収、家は闕所になっていた。祖父はしつこく追う天狗党の目を逃れて、わずかの金を襟に縫い込んで放浪の旅に出たが、明治維新になって世の中が変わったので、祖父は東京に出て済生学者の門をたたいた。たぶん、刀をさして歩く時代が終わったため、これからの世の中は学問で身をたてなければと思われたのだろう。しかし、祖父にとっては藩学で学んだ漢籍の力ではドイツ語の医学書に難儀したとのこと。

前期の試験は明治22年2月、そして、後期に試験に受かったのは明治28年の10月だから、何と7年もかかったのだった。後期の試験が通った時、しばらくは病院に勤め、明治30年11月、東京で開業しお世話になった人々にお礼返しをしたとのこと。

それより、少し前の明治22年4月26日に茨城県知事から家名再興許可の通知を頂いた。しかし、当時、天狗党であった弟が、家、屋敷を引き継いでいたので、その書類だけがわが家に残っている。

祖父はその通知を受けてから、刑死した登一郎様の墓を一族の墓に並べて新設した。昭和に入ってから、那珂町の鱗勝院にあることを町で調査して、町の文化財に登録したとの知らせを聞いた。

祖父は明治 32 年に祖母の実家のある中条町に移り住み、かつてお世話になった祖母の実家の人々の医療を無料サービスとした。やがて祖父は中条を終の住家ときめ、当時、赤痢や腸チフスが流行するたびに開院される避難病院の当番医をしたり、晩年は柴橋小学校の学校医などもつとめた。

祖父は、晩年しきりと水戸をなつかしがって「おれ死んだら親父のそばに小さい墓を作ってくれないか」と晩酌の時など言い言いしたが、と祖母がぼやいていた。そして祖母はその度毎に「お墓参りもままならないもの中条のお寺にしましょう」と説得したとか、しかし本心はわからない。でも祖父の墓は中条の善良寺にある。

祖父が気にしていた曾祖父登一郎様の墓参りは、母が存命中は必ず秋の彼岸に水戸まで出掛けていたが、母亡き後は私が秋の彼岸にお布施を送り続けている。「おじいさまこんなことでごかんべんください」と言いわけしながら。

以上

(中城町公民館発行誌より 平成 12 年 5 月 19 日)

★水戸藩与力 寺門登一郎

元治元年 尊攘派追討に活躍時移り明治元年 (1868)、寺門登一郎は水戸を脱出し、会津から仙台に向かったが新政府に捕らえられ入牢後、元居村・茨城県那珂郡額田村で明治元年 7 月 21 日 刑死「磔刑」、大正 5 年 3 月 27 日 墓碑建立

★長男・寺門彦太郎 (当時 13 歳) は、明治元年市川諸生軍に参加し会津城攻防戦を生き延びたが、額田村では生きることができず各地逃走の末、新潟県関川村に落ち着く。

大正 6 年没。その生涯は、子孫の寺門登志様の手記に詳しく記録されています。(川上)



鱗勝院 本堂(茨城県那珂市額田)



鱗勝院 寺門登一郎の墓

★登一郎辞世の歌が墓碑左側面に次の通り刻んである

さいごじせい
最後辞世

きみ たためす いのち たたおも くにの ゆくすえ
君の為捨つる命はおしまねど 多思ふらん国能行末

平成 21 年 9 月 23 日 南無釈迦牟尼佛為忠山義道清居士精霊彼岸会供養 寺門登志